



自然遊学館 だより



カヤモノリ

冬から春にかけて生育がみられる褐藻の海藻。細長く中空の管状の体に、ところどころくびれがあります。萱の葉に似ることから萱藻海苔です。二色の浜突堤横に群生，2019年3月22日。

2019 SPRING

No.91



2019.5.10 発行 貝塚市立自然遊学館

目次

*ネイチャーレポート

ほの字の里で見つかった

カタツムリ（陸産貝）の仲間…………… 児嶋 格…1

*行事レポート

春の七草摘みハイキング…………… 白木江都子… 5

打ち上げ貝拾い…………… 山田浩二… 6

和泉葛城山の陸産貝調べ…………… 山田浩二… 8

西鳥取漁港見学とノリスズキ体験 …… 澤田智子… 9

千石荘&近木川河口ボードウォッチング
…………… 鈴子勝也… 11

*泉州生きもの情報

アカツノカニムシ…………… 山田浩二… 13

二色の浜で打ち上げられたヌートリア
…………… 山田浩二…13

*館長コーナー

25周年記念行事とボランティア調査

…………… 高橋寛幸… 14

*特別展報告

「2018年の自然遊学館の出来事」… 岩崎 拓… 16

*調査速報

貝塚市二色の浜と近木川周辺の鳥調査 12

…………… 鈴子勝也… 18

和泉葛城山昆虫調査速報2018…………… 岩崎 拓… 19

*ホームページ

自然遊学館 HP-昆虫 1…………… 岩崎 拓… 22

*寄贈標本…………… 23

*スタッフ日誌…………… 27



ネイチャーリポート

ほの字の里で見つかった カタツムリ（陸産貝）の仲間

陸産貝は移動能力が低く、乾燥に弱い生物でナメクジ以外は殻を背負っています。また種類ごとに住み分け、生息する場所が決まっています。寒い冬の間は大きな木の根元や倒木の裏側、落葉の中、石垣の間、石積の下などに隠れて冬眠します。殻の大きさは殻径 5 cm 位から小さいもので 1~2 mm の種類もいて特に微小種は注意して探さないとなかなか見つけることが出来ません。貝塚市蕎原にある「ほの字の里」周辺には陸産貝の生息に適した環境が残されていて、移動しながら観察できる良い場所も見つかりました。冬季は落葉の中に住む種類が一番見つけやすく観察するのに適しています。

2019年2月2日、ほの字の里周辺で「和泉葛城山の陸産貝調べ」観察会が行われました。この辺りは陸産貝の未調査の場所であって、また冬期に行う観察会も初めてでしたので事前の下見を前月の1月に3度行い、観察会に備えました。

当日は強い冷え込みもなく天気も良くてまずまずの観察日和でした。室内で簡単に観察の仕方や陸産貝の説明をしたあと野外に出て採集を始めました。駐車場横が1番目の観察場所でケヤキなどの落葉灌木の落葉が堆積する場所があって最適な観察ポイントです。落葉の中で住む貝は殻径 2 mm 前後と小さい種がほとんどなので、見つけられるか心配でしたが早速に「この貝なんですか」と声がかかり、見ますとキビ

ガイ（図 1）の生貝でした。続いて見つかったのがケヤキの落葉に着いたカトウナタネガイ（図 2）でした。殻径 2 mm にも満たない小さな貝ですが動きは早く落葉の裏に隠れようとします。この貝は発見数が少なく、水間公園で2個体しか採集した記録がない種です。



図 1. キビガイ



図 2. カトウナタネガイ

2番目の観察場所はシイタケ栽培の使用済みほだ木の積まれた場所で、周辺には竹林と雑木林が混成する林です。ここでは水間が模式産地になっているウスイロシタラガイ（図 3、絶滅危惧Ⅱ類：大阪府レッドリスト、以下同文献に準拠）が落葉の中から見つかりました。この貝も殻径 2 mm 位で、暖かい時期には木に登り低灌木の葉

裏で見つかる種です。冬期は落葉の中で過ごしていることが分りました。ナミヒメベッコウ (図 4)、ヒメベッコウガイ (図 5)、ミジンヤマタニシ (図 6)、カサキビ (図 7) なども見付き、微小貝の採集に目が慣れてきたのかあちこちから、あった！見つけたよ！の発見の聲が上がり、観察にも熱が入ってきて一安心しました。



図 3. ウスイロシタラガイ



図 4. ナミヒメベッコウ



図 5. ヒメベッコウガイ



図 6. ミジンヤマタニシ



図 7. カサキビ

第3番目のポイントは道路わきに積まれたほだ木の山です。ほだ木を返すとウスベニギセル (図 8) が2個、3個と見付き大喜びです。少し道路を先に歩き、杉の木のあるポイントに移動しました。杉の落葉の堆積場所には微小種が多く生息しています。堆積した杉の葉の重なりが落葉の間に隙間のある生息空間を作り、微小貝にとっては安定した湿度環境と隠れる場所になっているのだと考えられます。ここではヒダリマキゴマガイ (図 9)、ニホンケシガイ (図 10、絶滅危惧 I 類)、ヒメベッコウガイ、ミジンヤマタニシなどが見付きました。ニホンケシガイは貝塚市初記録の種で長年探していた貝です。谷の方に下りていたグループは、オオケマイマイ (図 11) やギュリキマイマイの大型種を見つけていました。



図 8. ウスベニギセル



図 9. ヒダリマキゴマガイ



図 10. ニホンケシガイ



図 11. オオケマイマイ



図 12. ヤマクルマガイ (裏面から撮影)

人家のわきの空き地に置かれていたビニールシートをめくると蓋に特徴のあるヤマクルマガイ(図 12)が見つかりました。ここではウスカワマイマイやオカチヨウジガイ、トクサオカチヨウジガイなどの死殻も見つかりました。廃車のボンネットに不思議な形の模様がついているのを見つけ、これがカタツムリの食みあと(食事のあと)だと話すと盛り上がり写真を撮る人もいました。

この他に下見の時にシメクチマイマイ(図 13)、ケハダビロードマイマイ(絶滅危惧Ⅱ類)の生貝やヒメカサキビ、オオウエキビ、コシダカシタラガイ、コベソマイマイなどの死殻も見つかっています。シメクチマイマイは同定の難しい種ですが殻表に密に顆粒状構造があることでニッポンマイマイと区別することができます。



図 13. シメクチマイマイ

午後からは、ほの字の里の実習室裏の暖かい日だまりで、持ち帰った落葉の中からフルイを使って微小種を探し出しました。平素見ることのない落葉の中の世界に住む小さな生き物たちと出会え、自然を見る目がより深く広がり、身近にあるごく小さな自然環境の中に住んでいる生き物たちを観察することによって、自然の大切さを実感して下されば今日は有意義な1日になったはずです。

雨が降った時のことを考えて先に用意して置いた落葉を持ち帰り調べて見ると北海道と本州の高山帯に分布すると言われるナガナタネガイ(図14、情報不足)が見つかりました。この貝も貝塚市初記録となる種で府下では箕面公園で見つかった珍しい種類でした。

ほの字の里周辺では16種の陸産貝の生息が確認でき、その内のニホンケシガイとナガナタネガイは泉州地方では初記録となる種類でした。死殻で見つかった種は7種あり、合わせて23種類の陸産貝を記録することが出来ました(表1)。



図14. ナガナタネガイ

表1. 観察会で記録された陸産貝リスト ほの字の里周辺 2019.2.2

		殻高×殻幅		
前鰓類	ヤマタニシ科	ミジンヤマタニシ	1 × 2mm	L
	ヤマクルマガイ科	ヤマクルマガイ	4 × 11mm	L
	ゴマガイ科	ヒダリマキゴマガイ	2 × 1mm	L
有肺類	ケシガイ科	ニホンケシガイ	2.3 × 0.8mm	L
	キセルガイ科	ウスベニギセル	14 × 4.2mm	L
	オカクチキレガイ科	オカクチキレガイ	5 × 2.3mm	D
		トクサオカクチキレガイ	9.3 × 3.2mm	D
	ナタネガイ科	カトウナタネガイ	1 × 1.6mm	L
	キバサナギガイ科	ナガナタネガイ	1.7 × 5.8mm	L
	ベッコウマイマイ科	カサキビ	3.3 × 3mm	L
		ヒメカサキビ	1 × 2mm	D
		オオウエキビ	2.3 × 2mm	D
		キビガイ	1.8 × 1.9mm	L
		ヒメベッコウガイ	1 × 1.8mm	L
		コシダカシタラ	2.1 × 1.9mm	D
ウスイロシタラ		2 × 2.5mm	L	
ナンバンマイマイ科	ナミヒメベッコウ	2.8 × 4mm	L	
	コベソマイマイ	28.6 × 36mm	D	
	シメクチマイマイ	13.5 × 17.5mm	L	
	ケハダビロードマイマイ	10 × 20mm	L	
オナジマイマイ科	オオケマイマイ	10.8 × 24mm	L	
	ウスカワマイマイ	17 × 18mm	D	
	ギュリキマイマイ	23 × 43mm	L	

計23種(L:16種、D:7種) L:生貝、D:死殻

※

前鰓類: 殻には蓋があり、触角は1対、目は触角の付け根にある(例外あり)。雌雄異体。

有肺類: 殻には蓋がなく、触角は2対(大触角と小触角)。触角の先端に目がある。雌雄同体。ナメクジ類は殻をもたない。キセルガイ科は左巻き。

参考文献

大阪府(2014)『大阪府レッドリスト2014』、48pp.
 東 正雄(1982)『原色日本陸産貝類図鑑』、保育社、p88、p93。
 松村 勲(2001)『大阪府陸産貝類誌』、近未来社、294pp。
 児嶋 格(2017)『貝塚市のカタツムリー貝塚市に住む陸産貝類ー』、貝塚市立自然遊学館、16pp。

(自然遊学館客員講師 児嶋 格)

行事レポート

春の七草摘みハイキング

日時：2019年1月6日(日)10:00~12:30

場所：蕎原ほの字の里周辺

参加者：27人

晴雨にかかわらず決行する行事なので、本年度からほの字の里研修室を利用することになりました。スタッフは、事前に採集した七草や、それらに姿形がよく似た植物、現在名と昔の呼び名の違う植物などを掲示しながら参加者を待ちます。掲示した植物は、セリ・ナズナ・ハハコグサ・ハコベ・コオニタビラコ・カブラ・ダイコン・キュウリグサ・オランダミミナグサ・チチコグサモドキ・タネツケバナ・タンポポです。

10時になると、大人11人・子ども11人が集合、スタッフ紹介の後、実際の植物をお見せしながら、説明を始めました。貝塚市内の子どもたちは小学校2年生になると、学校で七草のことを習うそうで、男の子が「セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロこれぞ七草」と元気よく答えてくれました。

セリとナズナはいいのですが、ごぎょう・はこべら・ほとけのざ・すずな・すずしろは、昔の呼び名と現在の植物名が違います。また地面にへばりついて冬の日光を精一杯受けようとしているロゼット状のこの時期の植物は、茎も伸ばさず花もつけていないものが多いので、どれも酷似していて、七草摘みのハードルを上げています。子どもたちだけではなく大人も、日頃は「草(クサ)」や「雑草」で片付けてしまう

野草の細かな違いに苦労します。「3年続けてこの行事に来ていて、今年は初めての人よりは分かるかも」と、少し自信ありげなお父さんもおられました。研修室でそれらの違いを学習しても、他の多くの植物と混生している実際の田畑では、なかなか難しいのは当たり前です。

ついつい話が長くなり、10時半頃慌てて外に出ました。長らく放置され、田んぼの跡とは見えない草ボウボウの土地で、セリとハコベを探してもらいました(図1)。他の植物に混じって生えるハコベを見つけることは意外に難しく、カラスノエンドウの幼体を間違って採集してくる人が多かったようです。セリは、ウマノアシガタやキツネノボタンに似ていて、後者は有毒植物だと注意をしていたので、「これセリで間違っていないか」と確かめる人が続出です。日頃は目にも留まらない野草を、しっかり眺めて探す、いい機会だと思いました。この場所は昨年よりもセリが増えていて、コオニタビラコやハハコグサは全く見つけられませんでした。



図1. 春の七草を探す

続いて、毎年お世話になっている斉喜秀

利さんの田んぼと畑に向かい、まずは蕎原の田畑ではあまり目につかないナズナを採集します。ナズナは枯れかけた花や実を付けている個体があるので、その株元から株別れして新しく芽を出した個体や、すぐ傍らに種から芽生えたロゼット状のものが見つかることを紹介しました。比較的近くに種が飛ぶので、ひとかたまりになって生えています。タネツケバナは同じような場所に生え、花も同じように細かく白いので紛らわしいですが、種子がついてさえいれば果実の形が全く違うので見分けられます。

店で売っている七草セットでも、違う植物が入れられていることの多いコオニタビラコは、田んぼの周りでしか見あたりません。畑には生えないし、田んぼにしても耕作機の届かない外周だけです。蕎原の田んぼにはたくさん生えているのですが、キク科植物の芽生えはみんなよく似ていて、スタッフも「？」と悩むことがあります。葉の切れ込みが強くて、少し大き過ぎるかなと思ったときは、スカシタゴボウかなと疑うことが必要です。もっとも間違っても食べても毒ではありません。キュウリグサも、形や大きさ、葉の切れ込み具合や雰囲気もコオニタビラコそっくりなので要注意です。紛らわしい植物の多いコオニタビラコは、幸いたくさん生えているので時間が経つと正解率が上がってきて、全員がゲットするようになりました。

街中の庭や道端に普通に生えているハハコグサが、蕎原ではなかなか見つかりません。特に子どもたちには、オランダミミナグサの芽生えと、ハハコグサの芽生えの

違いが難しいようです。畦を歩いてもなかなか見つからなかったのですが、下見の折に畦の一箇所とそのすぐ下の田んぼの中にたくさん見つけていましたので、そこに案内して「生えている場所、その環境をよく見て必要な分だけ採り、根こそぎは止め来年のために置いてください」とお願いしました。その場所を見た後は、自分で発見する人の確率がグンと増えます。

11 家族全員が、自力採集した5種類をポリ袋に入れてほの字の里研修室へ戻り、簡単なまとめをした後、自然遊学館館長の手で育てられたカブラとダイコンをお渡しし、行事を終了しました。

明日の朝、^{まないた} 狙の上に乗せ、「七草なずな唐土の鳥が 日本^{とんど}の土地に 渡らぬ先に」と囃し立てながら、包丁をトントン響かせて刻んで下さいといつものようにお願いしたのは言うまでもありません。穏やかなお天気にも恵まれ、楽しい行事でした。

(白木 江都子)

打ち上げ貝拾い

日時：2019年1月26日(土) 13:00~16:30

場所：近木川河口、自然遊学館

参加者：32人(うちスタッフ8人)

日本財団「海の学びミュージアムサポート」助成事業

好天の下、近木川河口右岸の前浜に降り、参加者みなさんと、打ち上げられた貝を約1時間拾い集めました(図1)。昨年秋の台風の影響で、例年に比べ打ち上がった流木が多く目立ち、見つかる貝殻は少なめでし

た。多く目にした貝殻はアサリ、マガキ、ホトトギスガイ、クチバガイといった二枚貝でした。



図1. 近木川河口で貝殻を拾い集める

参加者の拾い集めた貝殻は自然遊学館に持ち帰り、講師の児嶋格さん、大古場 正さんに種類を解説頂き、ホワイトボードに書きだしました(図2)。巻き貝類17種、二枚貝20種、淡水産3種、陸産6種の計46種の貝殻が集まりました(表1)。昨年は雨天で貝拾いは中止しましたので、一昨年と海産種の貝殻で比較すると48種から37種へと種数はやはり少なくなっていました。人気のある薄紅色したサクラガイは全部で10個ほどしか集まりませんでした。また今回、ウミニナが採集されましたが、2004年から近木川右岸で行ってきた本観察会では初めての記録になりました。近木川河口でのウミニナの生息状況は、2016年から右岸側で急激に個体数が増加したのが確認されています(本誌)。



図2. 拾い集めた貝殻の解説

表1. 観察会で確認した打ち上げのリスト

グループ		和名	2019/1/26 40人	
腹足綱	スカシガイ科	テンガイ	rr	
	ニシキウス科	コシダカガンガラ	r	
		イシダタミ	r	
	サザエ科	サザエ	rr	
		スガイ	rr	
	アマオブネガイ科	イシマキガイ	r	
	タマキビ科	タマキビ	rr	
	ウミニナ科	ウミニナ	r	
	カリバガサガイ科	シマメノウフネガイ	r	
	タマガイ科	ツメタガイ	r	
	アツキガイ科	アダムズタマガイ	rr	
		カゴメガイ	rr	
		レイシガイ	rr	
		イボニシ	r	
		アカニシ	rr	
	フトコロガイ科	ムギガイ	r	
	ムシロガイ科	アラムシロ	r	
	二枚貝綱	フネガイ科	カリガネエガイ	r
			サルボウガイ	r
			クチバガイサルボウ	r
イガイ科		ムラサキイガイ	r	
		ミドリイガイ	rr	
		ホトトギスガイ	c	
イタヤガイ科		アズマニシキ	rr	
ナミマガシワ科		ナミマガシワ	r	
イタボガキ科		マガキ	cc	
チドリマスオ科		クチバガイ	c	
ニッコウガイ科		サクラガイ	rr	
シオサザナミガイ科		オチバガイ	rr	
		イソシジミ	r	
		マテガイ科	マテガイ	rr
		フナガタガイ科	ウネナシトマヤガイ	rr
イワホリガイ科	セミアサリ	rr		
マルスダレガイ科	オニアサリ	r		
	カガミガイ	rr		
	アサリ	cc		
オオノガイ科	オオノガイ	rr		
淡水産	タニシ科	ヒメタニシ	rr	
	リンゴガイ科	スクミリンゴガイ	c	
	サカマキガイ科	サカマキガイ	rr	
陸産	アズキガイ科	アズキガイ	r	
	キセルガイ科	ナミギセル	rr	
		ナミギセル	rr	
	オナジマイマイ科	ウスカワマイマイ	rr	
	オオケマイマイ	rr		
クチベニマイマイ	rr			
腹足綱	コウイカ科	コウイカ属の一種	rr	
計			47	

凡例：数量……cc 多数、c 普通、r 少数、rr ごく少数

種類を確認した後は、紙皿に各自お気に入りの貝殻と種名ラベルを貼り付けて標本壁飾りを作成しました（図3）。



図3. 参加者の作った貝殻標本壁飾り

(山田 浩二)

和泉葛城山の陸産貝調べ

日時：2019年2月2日（土）9：00～16：00

場所：蕎原（ほの時の里周辺）

参加者：23人（うちスタッフ8人）

日本財団「海の学びミュージアムサポート」助成事業

はるか昔、海から陸に進出した巻貝の仲間であるカタツムリ。乾燥に弱く、移動能力が低いカタツムリの仲間は様々な場所に種類ごとにすみわけ、環境に順応し、世代交代を繰り返して生きています。この陸産の貝を和泉葛城山のふもとにある蕎原で調べてみようというのが今回のテーマでした。

「ほの字の里」にある研修室に集合し、講師の児嶋格さんよりカタツムリの体の作りや、周辺を下見した際に見つかっている18種について冊子とスライドで紹介がありました（図1）。



図1. 陸産貝について説明をうける

山あいの施設なので外は林に囲まれています。まず、駐車場の横の林床で陸産貝を探していきました。カタツムリは木の上や壁を這っていて容易に見つかるイメージですが、真冬の寒い時期はそうはいきません。落ち葉や倒木の下などに隠れているのです。落ち葉を拾っては丹念に目を凝らして、小さな貝を探します。ニホンケシガイやカトウナタネガイといった1、2mmの貝などが徐々に見つかりました。

次に倒木がまとめて置いてある場所へ移動し、倒木の隙間を調べると大きめの陸産貝であるギュリキマイマイなどが見つかりました。小さな倒木をめくると、多くのウスベニギセルが隠れているのを見つけました（図2）。



図2. 倒木の下に多くのウスベニギセル

林道を進み、その脇の林床で、厚く積もった落ち葉をふるいにかけて貝を探していきました(図3)。ふるうと貝だけでなく、クモやカニムシなどの小さな土壌動物が動いているのも目につきます。研修室に戻ってからもしばらく拾い集めた腐葉土をふるう作業を行ってから、どんな貝が見つかった児嶋講師、大古場講師に種名を教えてもらいました。



図3. 落ち葉をふるい陸産貝を探す

サイズの小さな貝が多いので、ルーペでその貝殻や軟体部の様子を観察しました。この日、見つかった貝は生貝が16種、殻のみが7種の計23種でした。ちなみに和泉葛城山の山頂周辺では、これまでに28種が観察されており(児嶋、2013)、このうちミジンヤマタニシ、ウスベニギセルなど8種が共通した種でした。

引用文献

児嶋 格 (2013) 和泉葛城山の陸産貝の観察記録. 自然遊学館だよりNo.66 : 1-3.

(山田 浩二)

西鳥取漁港見学とノリスき体験

日時：2019年2月9日(土)9:00~16:00

場所：二色の浜

参加者：22人(うちスタッフ9人)

日本財団「海の学びミュージアムサポート」助成事業

本イベントは、「大阪湾を『食』という観点から見てみよう」を目的としたもので、昨年に大好評だったイベントです。

まだ寒い季節真っ只中である2月は海苔の収穫期で、乾燥した海苔になる前の生海苔が味わえる嬉しい季節でもあります。

「ノリスき」とは生海苔をミキサーで砕いて目の細かい“よしず”の上で水分を取り、数日かけて乾かすことで板ノリを作る作業のことです。本年も昨年に引き続き、ノリ養殖をされている名倉水産の名倉氏にお世話になりました。



まだ、2月の寒い季節ですので、みんなは「手が冷たいよ～」と言いながら、何度も何度もノリスきをやって、手が真っ赤になっていました。四角いのりだけでなく、ハート型や十字形などにも作ることができて、夢中になれる体験でした。



ノリスき体験の次は、この漁港で養殖しているカキの殻についている様々な生き物を取り除きながら観察する体験をしました。



専用の小さなナタを使って、カキ殻の表面に住み着いている海綿やウロコムシ、ゴカイの仲間などを取り除いたり、殻の中からカクレガニの仲間が逃げ出してくるのを捕まえたり、普段することのできない体験ができました。

今年は、数年前より西鳥取漁港の名を有名にしているカキ小屋（西鳥取漁港で養殖した新鮮なカキを食べられる期間限定の食堂）が大盛況のため、名倉氏からお話を聞くことができませんでした。しかし、元・大阪府水産技術センターの鍋島氏を講師としてお招きし、ノリやカキの詳しい生態

を教えてくださいました。

鍋島氏よりご教授いただいた内容を少し紹介します。

～真っ黒で美味しいノリにするために～

ノリは紅藻の仲間であるアマノリ属に分類される海藻から作られ、中でも有名なのはアサクサノリ、スサビノリ、ナラワスサビノリなどで、現在は病気に強いスサビノリを使ったものが主流になっています。

秋の海水 20℃ほどの時期に、ノリの胞子をカキ殻の表面で成長させた後、網に付着させます。その網を海に広げ、ノリを発芽・成長させて、葉状になる2月頃に収穫します。

ノリという海藻は体全体で栄養を吸収するので、海流がなければ良いノリに成長できません。また、人にとってはアミノ酸を多く含んだノリが美味しいのですが、そのためには海水にチッ素がなければ作れません。しかし、海流がどのように流れるか、ノリの成長時期に海水中にチッ素が十分にあるかどうかは、人が左右することのできない自然現象です。近年では海が綺麗になりすぎてチッ素が少なくなったり、温暖化で海流の流れが予測しにくくなったり、同じく温暖化でノリを食べてしまう南方系の魚が来てしまったりと、多くの問題がノリ養殖に携わる方々を悩ませているそうです。

みなさんが食卓でみる板ノリは、色によって階級が変わり、真っ黒なノリが「特等」や「1等」となり、色が抜けてしまったような赤色っぽいノリになると「3等」に落ちてしまいます。当然、特等のノリは美味しく風味もあり、2等、3等と落ちると美味

しくなくなってしまうです。

ノリ養殖業者のみなさんは、どうすればノリに上手に海流をあてることができるのか、どうすれば病気にならせずに成長させることができるのかを考え、風味のよい美味しい黒いノリにするためにたくさんの工夫と研究を重ねておられます。



他にもカキの養殖方法や本日のカキ殻に付いていた生き物についても、たくさん教えてくださり、深い知識をご教授頂いた素晴らしいお話でした。

(澤田 智子)

千石荘 & 近木川河口

バードウォッチング

日時：2019年2月23日(土) 10:00～15:00

場所：千石荘 (10:00～11:30)

近木川河口 (13:30～15:00)

参加者：18名

午前から千石荘周辺で午後から近木川河口周辺の野鳥観察を行いました。講師には、和田太一さん(NPO 法人南港ウェットランドグループ)に担当して頂きました。

千石荘の周辺は開発が進んでおり、通りやすい道がいくつか作られていました。毎年、下原池から観察を開始するのですが、始まる前にサギの仲間やカワウが飛び去ってしまい、双眼鏡の使い方を説明するための野鳥が一時的にいなくなり、電柱でピントを合わせる練習をしていると、木の上にシジュウカラがツピーツピーと鳴きだし、観察することが出来ました。千石荘ロータリーから千石荘養護学校跡地に向かう途中で、木の上にメジロの群れや千石荘病院跡地には、地面ではなく、木の上でツグミを観察することができました。

カンコ池に行くとカイツブリが4羽確認できました。池の対岸を見るとカワセミが木の枝に止まっていました。上空を見上げるとミサゴのオスとメスが飛んでいて、カンコ池にダイブして、魚をとらえる場面がありました。



ミサゴ

ポタン池に向かうと少しの間、ノスリが飛んでいました。農耕地ではスズメとモズを観察することができました。ロータリーに戻ってきて、和田先生による解説が終わった後にシメを観察することができました。千石荘では、25種類の野鳥に出会うこ

とができました。去年に比べると種類が減っていたのですが、台風 21 号の影響で木が倒れた影響や千石荘で人による手入れが加わって減ってしまった可能性もあると思います。



和田太一先生による解説

近木川河口では、毎年、カモの仲間が多く確認できます。自然遊学館から近木川河口に向かう途中で、モズ、スズメ、メジロなどを観察することができました。近木川河口では今年はカルガモを一番多く確認することができました。他にもヒドリガモやオナガガモも観察できました。上空では、ミサゴがぐるぐる飛んでエサを探していました。汽水ワンドに向かうとカルガモの中にマガモとカルガモの交雑した個体を確認することができました。臨海線に上がるとコガモの群れが飛んできました。

近木川河口側に戻ってみるとオカヨシガモのオス 2 羽メス 1 羽を確認できました。近木川河口では 25 種類の野鳥に出会うことができました。去年に比べると種数は少し減り、カモの羽数もすごく少なかったです。例年、ホシハジロが何百羽と見られるのですが、今回確認できたのは 1 羽だけでした。その原因は、水深が浅い部分が

広がるなど、地形が変わってしまい、ホシハジロの生活できる環境に合わなくなったからかもしれません。



オカヨシガモ

バードウォッチング行事で確認された鳥類			2019年2月23日	
目	科	種	近木川	千石荘
カモ目	カモ科	オカヨシガモ	○	
		ヒドリガモ	○	
		カルガモ	○	
		オナガガモ	○	
		コガモ	○	
		ホシハジロ	○	
カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ	○	○
ハト目	ハト科	キジハト	○	○
		ドバト	○	○
カソドリ目	ウ科	カワウ	○	
ペリカン目	サギ科	アオサギ		○
		ダイサギ	○	○
		コサギ	○	○
ツル目	クイナ科	バン		○
チドリ目	チドリ科	シロチドリ	○	
	シギ科	イソシギ	○	
	カモメ科	セグロカモメ	○	
タカ目	ミサゴ科	ミサゴ	○	○
	タカ科	トビ		○
		ノスリ		○
ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ		○
キツツキ目	キツツキ科	コゲラ		○
スズメ目	モズ科	モズ	○	○
	カラス科	ハシボソガラス	○	○
		ハシブトガラス		○
	シジュウカラ科	シジュウカラ		○
	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	○
	ウグイス科	ウグイス		○
	メジロ科	メジロ	○	○
	ムクドリ科	ムクドリ	○	○
	ヒタキ科	ツグミ	○	○
	スズメ科	スズメ	○	○
	セキレイ科	ハクセキレイ	○	○
	アトリ科	カワラセウ	○	
		シメ		○
ホオジロ科	アオジ			○
種数			25	25

(鈴子 勝也)

泉州生きもの情報

アカツノカニムシ

2019年2月2日、貝塚市蕎原にある「ほの字の里」周辺で陸産貝調べの観察会を行った際に、落葉をふるうと見つかった小さな生き物のひとつにアカツノカニムシがいます(図1)。

カニムシは名前のおおりに、カニのハサミのような触肢を持ちますが、足は8本(4対)で、昆虫ではなく、クモに近い仲間です。採集した個体の体長は4mmほどの小ささですが、ルーペで見ると尻尾のないサソリのような外見で、見入ってしまいます。肉食性で、ハサミを使ってさらに小型の動物であるダニやトビムシなどを食べているようです。

アカツノカニムシは寒い時期だけに見かけるカニムシで、本州、四国、九州に分布し、山地の落葉の下に生息します。カニムシの中ではこれでも大型種になり、比較的細身の体で、触肢と頭胸部は赤みを帯びた褐色です。頭胸部にある単眼が1対なのも本種の特徴です。



図1. アカツノカニムシ
(貝塚市蕎原、2019.2.2)

アカツノカニムシ

学名 *Pararoncus japonicus*
節足動物門 鋏角亜門 クモガタ綱
カニムシ目 コケカニムシ科

参考文献

- 青木淳一 (1999) 『日本産土壌動物—分類のための図解検索』、東海大学出版会、1076pp.
- 皆越ようせい (2017) 『落ち葉の下の小さな生き物ハンドブック』、文一総合出版、120pp.

(山田 浩二)

**二色の浜で打ち上げられた
ヌートリア**

2019年3月14日早朝、二色の浜の砂浜をウォーキングされていた川口博さんより、「波打ち際で哺乳類の打ち上げ死体を見つけたよ」との知らせを受け、見に行くとヌートリアでした(図1)。これまで二色の浜でのヌートリアの打ち上げは、2012年1月22日に記録があり(本誌63号)、それ以来の記録となりました。

南米原産の外来種で、かつて毛皮採取のため西日本を中心に飼育されていましたが、毛皮の需要の落ち込みとともに野外に放されたり逃げ出したりして定着しました。ネズミ目ヌートリア科に属し、茶褐色の毛に覆われ、体重は5kgほどになります。門歯が大きくオレンジ色で、前・後足とも爪が鋭く、後足の指の間に水かきがあります。池沼や河川の岸部の土手などに巣穴を掘って生活し、泳ぐのが得意です。主に水

生植物や地下茎などを食べる草食性で、農作物を食害することもあり、環境省が定める特定外来生物に指定されています。

大阪府では 2000 年頃から淀川で確認され、北部を中心に分布が拡大しているようですが、南部でもよく見られる動物になってしまうのでしょうか。

参考文献

大阪府立環境農林水産総合研究所. ノートリア | 大阪府の外来生物. http://www.kannousuiken-osaka.or.jp/zukan/zukan_database/smart/sonota/
和田 岳 (2006) 大阪のノートリア. Nature Study 52(2):2.



図 1. 浜に打ち上げられたノートリア
(貝塚市二色の浜、2019.3.14)

(山田 浩二)

館長コーナー

25 周年記念行事とボランティア調査

当館は昨年 25 周年を迎えました。今回の館長コーナーではその記念行事を幾つかを紹介します。これらの行事は、今までの館の行事とは少し違う内容の観察会で、

『山は昔は海だった』シリーズとして行った山の調査・観察会でした。なお、これらの行事の内、以下の②以降の行事は『船の科学館』の『海の学びミュージアムサポート事業 P2』の支援を受けて行いました。

25 周年記念として行った行事一覧

・山は昔は海だった宝の石の話・・・

①

- ・和泉葛城山の鉱物と化石 現地見学会 (蕎原 (ほの字の里))・・・②
- ・和泉葛城山の鉱物と化石 講演会・・・③
- ・和泉層群の鉱物と化石 現地見学会 (新滝の池)・・・④
- ・和泉葛城山の陸産貝・・・⑤

テーマ：『山は昔は海だった。山には海のエキスがいっぱい』

① 6月24日(日)講演会

『宝の石の話』 講師：藤浦淳氏 (以下藤浦氏と表記) 当館の鉱物鉱石展示物寄贈者

② 8月25日(土)現地学習会

蕎原地区 (ほの字の里)

『和泉葛城山の鉱物と化石』

鉱物の話：藤浦氏、

化石：高田雅彦氏 以下高田氏と表記)
主な内容

午前には蕎原ほの字の里の研修室にて鉱物の話とその周辺での石採集
：藤浦氏

午後、秋山川添いの地層と化石の話：高田氏

③ 9月16日(日)講演会

『和泉葛城山の鉱物と化石』講演

宝の石の話：藤浦氏

化石の話：高田氏

- ④ 9月29日（土）現地学習会
泉佐野・上之郷新滝の池周辺
地層：高田氏、鉱物：藤浦氏



蕎原地区（秋山川添い）での地層観察会

- ⑤ 2月2日（土）陸産貝調査
貝塚市蕎原・ほの字の里周辺の陸産
貝（カタツムリ）調査
講師：児嶋格氏

前号以降のボランティア調査の紹介

89号で紹介したボランティア募集による観察・調査活動の内容について紹介します。これは、海と繋がる川の観察です。

調査内容と調査場所

1. 近木川のアユ調査（近木川下流域）
2. ホタルの寝床調査（蕎原地区）



蕎原地区でのホタルの寝床調査（水生昆虫採集）

3. プランクトン調査（二色の浜・
近木川下流域）

上記のプランクトン調査も含めたボランティア調査のことは、前号の館長コーナーでも紹介しています。ここでは4月以降のボランティア調査のお知らせとその様子を紹介します。

調査日：4月以降の第1、第3土曜日

調査時刻：10時から12時

調査内容：第1土曜日『アユとアマモ』

第3土曜日『プランクトン・
水質（漂着物）』



2019.4.6 二色の浜アマモ場の生きもの調べ

この時期になるとアマモ場も整い始め、多くの生きものが観察できました。この日はアメフラシやメバルの稚魚などが目立ち、タモ網ですくって観察できました。

ボランティア調査に興味のある方、一緒に観察調査活動をしませんか？興味のある方は是非当館までお知らせください。

電話 072-431-8457

(高橋 寛幸)

特別展報告

「2018年の自然遊学館の出来事」

1年間の出来事を振り返る特別展は、今回で8回目になります。2018年は自然遊学館25周年の年なのに、9月の台風21号によって、館前のケヤキが倒れたり、プレハブ倉庫が崩壊したり、3日間の停電で海水魚が死んだりなど、あまり良い年だったとは言えないかもしれません。

昨年の2017年展と同じく、行事の様子は、澤田智子さんに、館前に張り出している申込案内のポスターに、行事の結果を書き加えて、パネルを作製してもらいました。

大型モニターを使った展示では、2018年に貝塚市内や館内で撮影された生きもの動画や自然遊学館の行事動画32本を映しました。いずれもYouTube上にアップしたもので、長尺のものは省きました。2018年度も「海の学びミュージアムサポート」から助成金をいただき、その分の活動報告（主にボランティアによる調査結果）も展示しました。



図2. 展示会場の様子



図1. 2018年展のポスター

写真を説明付きで紹介した生きものは27種でした。貝塚市で初めて記録されたものでも、写真がダメダメなら紹介しづらいので、目新しいものばかりとは限りません。

たとえば、1月6日に山手の池でオンドリ、1月27日に近木川河口でツクシガモが確認されているのに（本誌87号）、紹介したものは、1月27日に市民の森でメジロがシャリンバイの実を食べている写真でした。鳥類で言えば、4月18日に近木川河口で見たアオアシシギが珍しいもので（図3）、

21年ぶりの記録となりました。



図3. アオアシシギ

やや反り返ったくちばしと青味掛かった色の脚が特徴です。春は北方へ、秋は南方へ移動する途中に寄る旅鳥で、単独で見ることが多いそうです。

哺乳類では初記録種がありませんでしたが、千石荘でアライグマの子どもをじっくり観察する機会がありました(図4)。その他、10月25日に稲谷で拾ったアナグマの死体を紹介しました。



図4. アライグマの子ども

ゲーゲーと鳴き、手を洗うような素振りも見せてくれ、かわいさを振りまいていましたが、皆さんご存知のように、特定外来生物に指定されていて、移動や飼育が禁止されています。

その他の脊椎動物は、2月25日に三ツ松で仕掛けに捕獲されたチョウセンイタチ、4月12日の和泉葛城山のコガタブチサンショウウオ、8月8日の近木川上流のカジ

カガエル、ヒキガエルの餌やりシーンなどを動画で紹介しました。

魚類では、これまで本誌で紹介してきたように、南方系の魚が次々に二色の浜で確認され、アミモンガラとナンヨウトツバメウオを写真で、アケボノチョウチョウウオを動画で紹介しました。

昆虫では、本誌で紹介したムネアカオオクロテントウや市内で76種目のトンボとなったスナアカネのほかにも、30種以上の初記録種が見つかっていますが、ここでは5月17日に和泉葛城山の山頂で撮影したクロモンキリバエダシャクの幼虫を紹介し(図5)。また、クモでは3種見つかった初記録種のうち、1月4日と12月13日の和泉葛城山のクロヤチグモを紹介しました。

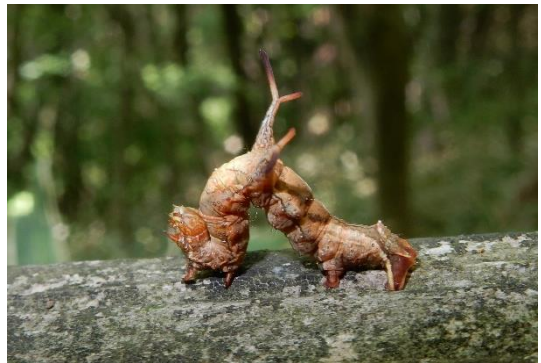


図5. クロモンキリバエダシャクの幼虫

左側が頭です。腹部の背側に小枝のような突起物が出ているのが特徴で、木柵の上で奇妙な動きをしていました。成虫は早春に出現し、当館には大川産(1996年3月7日採集)の標本があります。

植物に関しては、2018年も覚野良子さんにお世話になりました。新たに記録された幾つかの種のほかにも、開花情報などもいただき、山手に撮影に行った3月29日のヨゴレネコノメソウと4月12日のヒトリ

シズカ (図 6) を写真で紹介しました。



図 6. ヒトリシズカ

白い棒状の部分は花卉ではなく、雄蕊(=おしべ)だそうです。

最後に、標本展示としては、伊藤秋男・サダコご夫妻からの寄贈剥製のうちシカ・アナグマ・タイマイ、汽水ワンドの水生物標本、2018年に貝塚市内で採集された昆虫の標本、「トンボの池」で採集されたトンボの羽化殻、2016年と2017年の出来事展に引き続き、西村恒一氏寄贈チョウ類標本の一部などを展示しました。

(岩崎 拓)

調査速報

**貝塚市二色の浜と
近木川周辺の鳥調査 12**

毎年と比べると今年は、カモの量は少なく、例年多く見られていたホシハジロは、1回の調査で数羽しか見られていませんでした。カルガモだけがいつもより多く確認できました。

二色の浜公園周辺において2019年1月～3月に観察された鳥類					
目	科	種	1月 23日	2月 20日	3月 20日
カモ目	カモ科	オカヨシガモ		○	
		ヒドリガモ	○	○	○
		カルガモ	○	○	○
		オナガガモ	○	○	
		シマアジ			○
		コガモ	○		
		ホシハジロ	○	○	○
カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ		○	
		カンムリカイツブリ	○		○
ハト目	ハト科	キジハト	○	○	○
		ドバト	○	○	○
カツオドリ目	ウ科	カワウ	○	○	○
ペリカン目	サギ科	アオサギ	○		○
		ダイサギ		○	○
		チュウサギ			
		コサギ	○	○	○
チドリ目	チドリ科	ケリ			○
		シロチドリ	○		○
	シギ科	イノシギ	○		○
		ハマシギ	○		○
	カモメ科	ウミネコ			○
	セグロカモメ		○	○	
タカ目	ミサゴ科	ミサゴ	○		
	タカ科	トビ	○	○	○
スズメ目	モズ科	モズ	○	○	○
	カラス科	ハシボソガラス	○	○	○
		ハシブトガラス	○		
	シジュウカラ科	シジュウカラ	○		
	ヒバリ科	ヒバリ	○		
	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	○	○
	メジロ科	メジロ	○		
	ムクドリ科	ムクドリ	○	○	○
	ヒタキ科	ツグミ		○	○
		イノヒヨドリ			○
	スズメ科	スズメ	○	○	○
	セキレイ科	ハクセキレイ	○	○	○
		ビンズイ		○	
アトリ科	カワラヒフ		○	○	
	種数	27	21	27	



ビンズイ
(二色の浜公園 2019年2月20日)

(注) 写真の鳥は専門家の中村進さんからのご指摘を頂き、ビンズイに訂正しました。

和泉葛城山昆虫調査 2018

2018 年も和泉葛城山の山頂付近において 4 月から 12 月までの各月に 1 回ずつルートを決めて 3 時間程度の昆虫調査を行いました。その結果、および 2008 年以降の結果との比較を以下に記します。文末に各種の確認日を示しています。

1. 大阪府レッドリスト種

絶滅危惧Ⅱ類のナキイナゴは 11 年連続で確認されています。準絶滅危惧では、ミヤマアカネ、アキアカネ (図 1)、ヒトコブササキリモドキ、ハルゼミ、エゾゼミ (図 2)、アオバセセリ、ブナアオシャチホコを確認しました。このうち、ヒトコブササキリモドキ、ハルゼミ、エゾゼミの 3 種は、10 年以上連続で確認されています。また、情報不足に指定されているクシヒゲカゲロウを確認しました (本誌 50 号参照)。



図 1. アキアカネ
(トンボ目トンボ科、2018. 10. 9)

自分の調査では 8 年ぶりの記録となりました。この日は 3 羽を確認しています。前号でも書いた通り、2018 年は、和泉葛城山のほか、千石荘、麻生中、近木川河口汽水ワンドでアキアカネが確認されました。

近木川河口周辺において2019年1月～3月に観察された鳥類				1月	2月	3月
目	科	種	9日	6日	6日	
カモ目	カモ科	ヒドリガモ	○	○	○	
		カルガモ	○	○	○	
		オナガガモ	○	○	○	
		コガモ	○	○	○	
		ホシハジロ	○	○	○	
		ウミアイサ		○		
カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ			○	
		カンムリカイツブリ		○		
ハト目	ハト科	キジバト	○	○	○	
		ドバト	○	○	○	
カツオドリ目	ウ科	カワウ	○	○	○	
ペリカン目	サギ科	アオサギ	○	○	○	
		ダイサギ		○	○	
		コサギ	○	○	○	
ツル目	クイナ科	オオバン	○	○	○	
チドリ目	チドリ科	ケリ	○			
		シロチドリ			○	
	シギ科	イソシギ	○		○	
		ハマシギ			○	
	カモメ科	ユリカモメ			○	
カモメ				○		
		セグロカモメ	○	○	○	
タカ目	ミサコ科	ミサコ	○			
ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ	○			
スズメ目	モズ科	モズ		○	○	
		ハシボソガラス	○	○	○	
	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	○	○	
		メジロ科	メジロ	○		
	ムクドリ科	ムクドリ	○	○	○	
	ヒタキ科	ツグミ	○	○	○	
		インビヨドリ	○	○	○	
	スズメ科	スズメ	○	○	○	
	セキレイ科	ハクセキレイ	○	○	○	
		セグロセキレイ	○	○		
		ピンズイ		○		
アトリ科	カワラヒワ	○	○	○		
ホオジロ科	アオジ		○			
種数			27	29	27	



ウミアイサ
(近木川河口 2019年2月6日)

(鈴子 勝也)



図2. エゾゼミ幼虫
(カメムシ目セミ科、2018. 7. 12)

8月と9月の調査では成虫が確認されました。

これまでの調査で単年だけ確認された種は、生息密度が低いのだろうと推測されます。また、カヤコオロギのように2008年以降記録がないものは、もしかしたら既にいなくなっている可能性があります。また、ホソバセセリのように2011年から2015年まで5年連続で記録があったものが、ここ3年確認されないというような特徴的な消長もあります。

2. 注目種

山地性で貝塚市内での分布が山頂付近にほぼ限られるものを中心にリストアップしています。2016年6種、2017年12種、2018年7種と、一昨年水準まで、確認種が減ってしまいました。徐々に山地性の種が減少していく中で、2017年だけが特異な年であったのかは、今後も調査を続けていく中で明らかになると思います。



図3. トホシカメムシ
(カメムシ目カメムシ科、2018. 10. 9)

3. 標本がなかった種

自然遊学館に標本がなく今回初めて確認された種を文末のリストに示しました。図4に示したコウヤホソハナカミキリは赤色の腹部が特徴的です。



図4. コウヤホソハナカミキリ
(コウチュウ目カミキリムシ科、2018. 7. 12)

飛び立つ瞬間を捉えたのはいいのですが、採集に失敗しました。1週間後に同じ場所で鳥調査に同行した山口隼平氏によって採集されました。その7月19日には、同氏によって、ヤマナラシ(ヤナギ科)の樹洞で、注目種にあげているアカアシクワガタも採集されました。* ヤマナラシは湯浅幸子氏に同定していただきました。

4. その他

チョウ類は成虫26種を確認しました。ジャコウアゲハは2014年まで確認なかったのに、2015年から4年連続の確認とな

りました。イシガケチョウは、1992年から和泉葛城山の標本がそこそこあるのに、自分の調査では、10月9日の1個体が初めての確認でした。月1回の調査では、偶然に左右されることが多々あることの一例でしょう。

不思議なものがあると感慨深かったのは、ハチガタハバチです(図5)。最初はホソアシナガバチかなと思いました。吉田浩史さんの『大阪府のハバチ・キバチ類』という著書に和泉葛城山の記録が1例載っていますが、自然遊学館ではこれまで標本がありませんでした。



図5. ハチガタハバチ
(ハチ目ハバチ科、2018. 6. 14)

吉田(2006)によると、山地の林縁部にやや普通、幼虫の餌植物はサルトリイバラだと紹介されています。和泉葛城山の記録は、2002年6月、松本吏樹郎さん採集の1例が掲載されていました。

最後に、紹介した種の確認日(2018年の月/日)を示しました。日付の後の「*」印は幼虫での確認を示し、無印は成虫での確認です。

大阪府レッドリスト種

絶滅危惧Ⅱ類

ナキイナゴ 5/17*、6/14、7/12

準絶滅危惧

ミヤマアカネ 8/9

アキアカネ 10/9

ヒトコブササキリモドキ 7/12*、10/9

ハルゼミ 5/17、6/14

エゾゼミ 7/12*、8/9、9/27

アオバセセリ 5/17

ブナアオシャチホコ 7/12

情報不足

クシヒゲカゲロウ 7/12

注目種

ホソクビツユムシ 4/12*、7/12、9/27

ツノアオカメムシ 9/27

ツマジロカメムシ 5/17、9/27*

トゲカメムシ 7/12

トホシカメムシ 10/9

アサギマダラ 10/9

標本がなかった種

アラゲオオヒラタカメムシ 5/17

ハイイロビロウドコガネ 5/17

オニアカハネムシ 5/17

ルリゴミムシダマシ 6/14

アカネカミキリ 5/17

コウヤホソハナカミキリ 7/12

ホソアナアキゾウムシ 5/17

ハイイロビロウドコガネとルリゴミムシダマシの同定をしていただいた森康貴氏、およびアラゲオオヒラタカメムシとオニアカハネムシを同定していただいた澤田義弘氏に謝意を表します。

引用・参考文献

『大阪府レッドリスト2014』(大阪府、2014)

『大阪府のハバチ・キバチ類』(吉田浩史、2006)

(岩崎 拓)

ホームページ

自然遊学館 HP—昆虫 1

自然遊学館のホームページが 2019 年 3 月 1 日にリニューアルされました（貝塚市のホームページ全体に合わせてです、図 1）。その中に、貝塚の自然というページがあり、二色の浜、近木川河口から千石荘や馬場を経て和泉葛城山まで、エリア別の構成はそのまま移行しています。前回、2012 年のリニューアル時に、分類別というページも作る予定だったのに、ずっとほったらかしにしてしまいました。あれから幾年月です。申し訳ありません。



図 1. リニューアルされた自然遊学館 HP

今回のリニューアル後、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、クモ、カタツムリ、植物、キノコ類のページは、どういう種がいるのか、絶滅危惧種か、外来種かぐらいはどうか分かるように作成しました（エリア別の

ページにもその地域で撮影された、これらのグループの画像は掲載しています）。これらのグループは植物以外、種数がそれほど多くありません（左から順に、21 種、194 種、16 種、11 種、95 種、75 種、約 1,200 種、約 260 種）。でも、貝塚市で確認された昆虫類は 3,000 種を超え、一気にまとめ上げるには、気力が続きそうにありません。それで、たよりの今号から、昆虫の各目（各グループ）について、徐々にまとめていこうと思います。

古いタイプの昆虫から始めるのならカゲロウ目やトンボ目からですが、まずは一番好きなカマキリ目にします。というのは理由のすべてではなく、種数が少ないからです。これまでに 2 科 7 種が確認されています。大阪府には 8 種のカマキリが生息していて、貝塚市で見つからないのはウスバカマキリ（大阪府レッドリスト・絶滅危惧 I 類）だけです。最近、ホームセンターの竹藪に卵囊が付いて広がっていることが話題になっている外来種のムネアカハラビロカマキリも、貝塚市ではまだ見つかりません。

貝塚市のカマキリ目リスト

- カマキリ科
- オオカマキリ
- チョウセンカマキリ
- ハラビロカマキリ
- コカマキリ
- ヒナカマキリ
- ヒメカマキリ科
- ヒメカマキリ
- サツマヒメカマキリ

この中で、上の4種は比較的、目にする機会が多いと思います。この4種の中ではハラビロカマキリだけが樹上性で、草原にもいますが、樹上が主な生息場所です。

ヒナカマキリは成虫になっても翅が生えない(=とても小さい)小型のカマキリで(図2)、大阪府レッドリストにおいて準絶滅危惧に指定されています。自然遊学館の標本では、蕎原6個体、橋本1個体、近木川河口1個体(幼虫、図3)となっています。『検索入門 セミ・バッタ』という図鑑によると、「主に常緑広葉樹林にすむが、メダケ類の林や沿岸の松林などにも見られる」そうなので、周囲にクロマツ林がある近木川河口にいても不思議ではないのかもしれない。



図2. ヒナカマキリのメス成虫
(貝塚市蕎原、2006年10月14日)



図3. ヒナカマキリ幼虫

(貝塚市近木川河口、2016年5月22日)

ヒメカマキリとサツマヒメカマキリも小型のカマキリですが、成虫には翅があります。本誌39号で詳しく書いたように、両種は形態がとても似ています。違いはというと、ヒメカマキリは他のカマキリと同じく卵越冬、春にふ化して秋に成虫になって交尾・産卵という生活史を送るのに対して、サツマヒメカマキリは幼虫で越冬し、初夏に成虫になり交尾・産卵という生活史を送ります。ヒメカマキリの標本は5個体すべてが蕎原産で、サツマヒメカマキリは千石荘が6個体、その他、水間、三ヶ山、蕎原が各1個体となっています。

引用文献

- 岩崎 拓 (2006) サツマヒメカマキリ. 自然遊学館だより No. 39 : 8.
大阪府 (2014) 『大阪府レッドリスト2014』、48pp.
宮武頼夫・加納康嗣 (1992) 『検索入門 セミ・バッタ』、平凡社、215pp.

(岩崎 拓)

寄贈標本

<菌類>

◆廣野光子さんより

トガリアミガサタケ 3点

貝塚市蕎原 2019年3月26日採集

<鳥類>

◆食野俊男さんより

ハシボソガラス 死体1点

貝塚市小瀬 2019年3月2日採集

- ◆ 柏村奏斗・高階歩夢・岡田和大・
當山翔大さんより
スズメ 頭骨 1 点
貝塚市二色 2019 年 3 月 3 日採集

- ◆ 川口博さんより
カムリカイツブリ 死体 1 点
貝塚市二色の浜 2019 年 3 月 6 日採集

<魚類>

- ◆ 川口博さんより
コモンフグ 打上げ死体 1 点
ヒガンフグ 打上げ死体 1 点
貝塚市二色の浜 2019 年 3 月 25 日採集

- ◆ 柏村奏斗・松尾健太・松尾芽唯さん
より
アカエイ幼魚 死体 1 点
貝塚市近木川河口
2019 年 3 月 22 日採集

- ◆ シニア自然大学水生生物科より
ボウズハゼ 生体 1 点
ゴクラクハゼ 生体 1 点
チチブ 生体 2 点
スミウキゴリ 生体 1 点
ウナギ幼魚 生体 1 点
シマヒレヨシノボリ 生体 1 点
貝塚市近木川新井井堰
2019 年 3 月 22 日採集



ボウズハゼ
(全長約 6cm、♂)

<棘皮動物>

- ◆ アスピン・ブライアンさんより
トゲモミジガイ 生体 2 点
貝塚市二色の浜 2019 年 2 月 25 日採集

<軟体動物>

- ◆ 常道武士さんより
クチベニマイマイ 殻 1 点
貝塚市堤 2019 年 1 月 19 日採集

- ◆ 吉村芽唯・あやこさんより
キビガイ 殻 1 点
ウスベニギセル 殻 2 点
貝塚市蕎原 2019 年 2 月 2 日採集

- ◆ 岡田実紗・かよさんより
キビガイ 殻 1 点
ヒダリマキゴマガイ 殻 1 点
ケハダビロウドマイマイ 殻 1 点
貝塚市蕎原 2019 年 2 月 2 日採集

- ◆ 吉村芽唯さんより
ヤマグルマ 生体 1 点
ウスベニギセル 生体 8 点
貝塚市蕎原 2019 年 2 月 2 日採集

- ◆ 富恵皇成さんより
オオケマイマイ 成虫 1 点
貝塚市蕎原 2019 年 2 月 2 日採集

- ◆ 大古場正さんより
ギュリキマイマイ 生体 1 点
貝塚市蕎原 2019 年 2 月 2 日採集

- ◆ 川口博さんより
アメフラシ 打上げ生体 2 点
貝塚市二色の浜 2019 年 2 月 21 日採集
アカクラゲ 打上げ死体 1 点
貝塚市二色の浜 2019 年 2 月 23 日採集
アカクラゲ 打上げ生体 1 点
貝塚市二色の浜 2019 年 2 月 24 日採集

アマクサアメフラシ 打上げ死体 1点
貝塚市二色の浜 2019年3月27日採集

- ◆柏村奏斗・松尾健太・松尾芽唯さんより
ウミニナ 生体 10点
貝塚市近木川河口
2019年3月22日採集

<節足動物>

- ◆河田航路さんより
シラタエビ 1点
阪南市男里川河口 2015年4月17日採集
- ◆川口博さんより
タイワンガザミ 打上げ死体 1点
貝塚市二色の浜 2019年3月17日採集

<昆虫>

- ◆五藤武史さんより
テツイロヒメカミキリ 成虫 4点
高石市高師浜
2018年2月15日 幼虫採集
2018年6月6日 羽化
アカアシクシコメツキ 成虫 2点
貝塚市馬場 2018年5月10日採集
- ◆福島秀人さんより
ムクゲコノハ 成虫 1点
貝塚市二色 2019年1月7日採集
- ◆富恵皇成さんより
テラニシハリアリ 成虫 1点
貝塚市蕎原 2019年2月2日採集
- ◆鈴子佐幸さんより
トゲナナフシ 幼虫 1点

ヒメツチカメムシ 成虫 2点
貝塚市蕎原 2019年2月2日採集

- ◆常道武士さんより
アシブトハナアブ 成虫 1点
貝塚市澤 2019年3月19日採集

<クモ・ダニ>

- ◆初田幸大さんより
ウデブトハエトリ 幼体 1点
貝塚市蕎原 2019年2月2日採集
- ◆北川敏喜さんより
タカサゴキララマダニ 生体 1点
和泉市春木川町 2019年3月20日採集



タカサゴキララマダニ
(体長 20mm、満腹状態)

<寄贈写真>

- ◆覚野良子さんより
オニグルミ 1枚
サイゴクキツネヤナギ 1枚
ハバヤマボクチ 1枚
ヤマジノホトトギス 1枚
ホソバタブ 1枚
ツクバネガシ 1枚
シライトソウ 1枚
コガネネコノメソウ 1枚
ヨゴレネコノメ 1枚
ミヤマハコベ 1枚

ウスバヒョウタンボク 1枚
カナクギノキ 1枚

主に芽の写真、ほか28枚

岩湧山 2019年1月27日撮影

アケボノソウ 1枚
イワタバコ 2枚
ツカモトハコベ 3枚
ヒメサジラン 1枚
フデリンドウ 1枚

ユキワリイチゲ 1枚、ほか2枚

和泉葛城山 2019年2月3日撮影

ウスゲクロモジ 1枚
カテンソウ 1枚
クワガタソウ 1枚
ミヤマハコベ 1枚
ハクサンハタザオ 1枚
ヒメカナワラビ 1枚
マネキグサ 1枚
ヤマハタザオ 1枚、ほか5枚



クワガタソウ (コクワガタ)

和泉葛城山 2019年2月10日 覚野良子さん撮影

カテンソウ 1枚
シロバナショウジョウバカマ 1枚
ユキワリイチゲ 1枚
貝塚市蕎原 2019年3月9日撮影
アオキ 1枚

コオニタビラコ 2枚
ジロボウエンゴサク 1枚
ヤマネコノメソウ 1枚
貝塚市蕎原 2019年3月17日撮影
アブラチャン 1枚
イチリンソウ 1枚
シロバナショウジョウバカマ 2枚
タニギキョウ 1枚
ツカモトハコベ 1枚
ヒトリシズカ 1枚
フデリンドウ 1枚
ユキワリイチゲ 1枚
和泉葛城山 2019年3月17日撮影
アオイスミレ 3枚
和泉葛城山 2019年3月30日撮影
ウスバヒョウタンボク 1枚
和泉葛城山 2019年3月31日撮影
シロバナフデリンドウ 2枚
和泉葛城山 2019年4月7日撮影

◆藤村雅志さんより

シマアジ 5点
貝塚市近木川河口
2019年3月20日撮影



シマアジ

(近木川河口 2019年3月20日、藤村雅志撮影)

旅鳥。近木川河口に1羽飛来して、翌日には北方へ旅立ったようです。自然遊学館がまとめてき

た鳥類リストにはなく、貝塚市で195種目の記録となりました。

<目撃・鳴き声情報>

◆川口博さんより

ヌートリア 死体1点 (打ち上げ)

貝塚市二色の浜 2019年3月14日目撃

◆覚野良子さんより

コマドリ 鳴き声

和泉葛城山 2019年3月24日確認

<展示用標本>

◆上西永一さんより

ダチョウ 卵1点

オウムガイ 殻1点

スタッフ日誌

1月18日、西幼稚園から「冬に虫はどうしているの？」というお題をいただき、遊学館で飼育展示しているオオゴキブリ、カブトムシの幼虫、オオハサミムシ、オオカマキリの卵囊などを持って、話をしに行きました。園庭でも虫さがしをして、ハラビロカマキリやチョウセンカマキリの卵囊、アカハネオンブバッタ、ヒメツチカメムシ、オカダンゴムシなどを見つけることが出来ました。(岩・澤)

2月28日、泉佐野にお住まいで、歯科医をされるかたわら長年、貝の蒐集・研究に情熱を捧げられた岡村親一郎先生がご逝去されました。生前、先生の集められた貝殻標本の多くを当館にご寄贈頂いたり、シャコに付着するコフジガイの観察など多く

を御指導頂きました。ご冥福をお祈り申し上げます。(山)

3月1日、貝塚市役所のホームページのリニューアルにともない、自然遊学館ページも7年ぶりに大きく変わりました。引き続きご愛顧くださいますよう、よろしくお願い致します。(一同)

3月6日、館の横に新しいプレハブ倉庫が完成しました。昨年秋の台風21号で元あったプレハブ倉庫が倒壊したのを受け、建ててもらった次第です。大きさは半分くらいになりましたが、自然生態園の維持作業や行事で使用する大きめの道具を収める場所が確保され、一安心です。(一同)

* 自然遊学館だよりのバックナンバーは、下記のホームページよりご覧いただけます。

自然遊学館だより 2019 春号 (No.91)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/>

発行日 2019.5.10

この小冊子は店内印刷で作成しています。